

## 「古鏡帳」の三角縁神獣鏡図について

植地岳彦

[Takehiko Ueji : Sankakubuchi Shinjukyo Mirror recorded in the old mirror book]

キーワード：三角縁神獣鏡，鳴門市，古墳時代，守住貫魚，詮之介，守住勇魚

### はじめに

当館が所蔵する「守住家資料」に、幕末から明治の前半にかけて活躍したやまと絵画家、守住貫魚の子、詮乃介が描いた「三角縁神獣鏡図」があることが確認された。図は2枚あり、同じ鏡を描いたものと考えられる（図1、図2）。図1には、明治元年に現在の鳴門市大麻町大谷で掘り出され、鳴門市所在の東林院蔵と注記されている。三角縁神獣鏡は古墳時代の青銅鏡で、徳島県内では4面の出土例があるが、両図とは異なる鏡である。両図を描いた鏡と同範の可能性のある銅鏡は日本国内に6面確認できる。本稿では両図について考古資料としての情報を交えながら紹介する。

### 1. 三角縁神獣鏡図の特徴

三角縁神獣鏡を描いた2枚の図は、古鏡を集めた貼り込み帳にある。貼り込み帳には正式な名称はなく、当館では古鏡帳の名称で展示した<sup>①</sup>ことから、本稿でも古鏡帳と呼ぶ。古鏡帳は26.2cm×18.6cm、見開きでは37cm×26.2cmとなる紙製の冊子である。墨画、着色、墨拓、鉛筆画によって20面以上の古い鏡が収録されている。これら古鏡図には鏡の名称、所在場所、出土場所などが注記され、鏡の概要がわかる図もあるが、注記がなく由来が不明の図もある。徳島に関する注記があるのものは、三角縁神獣鏡を描いた両図だけである。

両図とも銅鏡の鏡背面図および断面図が紙に描かれ、古鏡帳の見開き頁に1枚ずつ貼り付けられている。両図は描写が異なる部分もあるが、特徴を示す部分では共通しており、同じ鏡の図と考えられる。

両図には共通の次のような特徴がある。

- ①神獣の配置：鏡背面図の内区は6個の乳で六等分した区画に、3個の神像と3個の獣像を交互に、求心的に配置している。
- ②神像の特徴：神像はどれも男神形と思われる。神像の胸から下では、膝が縦縞蒲団を弧状に曲げた形（樋口、1992）となっている。
- ③圏界：鋸歯文である。
- ④獣文帯：6個の小乳で区画され、その間には一文字ずつ方格内に書かれた「天」「王」「日」「月（日？）」「日」「月（日？）」の銘と獣像が配置されている。
- ⑤外区：内側より鋸歯文、複波文、鋸歯文が巡る。
- ⑥縁の形：断面図から、三角形であることがわかる。
- ⑦描写：外区の文様は一部のみ描かれている。
- ⑧断面図：鉛筆で描かれている。
- ⑨注記：鉛筆で記載されている。
- ⑩着色：なし。

また、次のような相違部分がある。

- ①描画材料：図1は墨画で、注記や断面図は鉛筆が使用されている。図2はすべて鉛筆を用いていると考えられる。
- ②鏡の外形：図1は銅鏡全体形状を描いている。図2は図の上端と下端の三角縁部分が描かれていない。欠損の描写はなく、鏝で不明とも考えられるがそれを示す注記がないことから、省略と考えられる。
- ③断面図：図1では図の上部中央に配置され、鈕

2021年11月30日受付、12月21日受理。

徳島県立博物館，〒770-8070 徳島市八万町文化の森総合公園・Tokushima Prefectural Museum, Bunka-no-Mori Park, Hachiman-chô, Tokushima, 770-8070 Japan.

がある鏡中央部分の上に鏡背面図が重なる位置にある。このため鈕付近の断面は描かれていない。鉛筆で描かれており、鏡背面図とは別のタイミングで描かれた可能性もある。図2では断面図は鏡背面図の左側に重ならないように配置され、鈕及び鈕孔の断面が描かれている。乳の断面は三角錐状である。断面図の左側半分は乳の断面がなく、それより外側は省略されているようだ。

- ④乳座：図1は左下にあたる2か所で振文が描かれ、他の4か所は描かれていない。図2では6か所全ての乳で振文が描かれている。
- ⑤獣文帯：図1は不鮮明であるが、魚形、鳥形、獣形などが描かれている。獣像の向きは時計回りに配置されている。図2は、ほとんどが魚形のように、向きが反時計回りに描写されているものがある。
- ⑥注記：図1の方が多くの文字情報が記されている。図2は文字情報が少なく、図1の内容を省略したと考えられる。
- ⑦描写を補足する注記：図1では上方右側神像と右側獣像に、格子状の描写があり、布痕跡を表現していると思われる。それを説明するかのようになり、上方右側神像の獣文帯から外区にかかる部分に「布目」と鉛筆で注記されている。また、縁部図上には「スシアリ」と鉛筆で注記されるなど、資料の表面状態を文字情報で記す。図2では文字による表面状態の記述はない。また、布目痕を表現する格子状の描写は、上方右側神像と上方左側獣像に描かれており、図1と位置が異なる。
- ⑧鏡外形などの円描写：図1では短い円弧の線を継ぎ足して円形を描いている。鏡の直径は縦軸23.5cm、横軸22.7cmとやや縦長である。図2では円は正円に近く、図1のように継ぎ足して描いた痕跡はないが、円を描く線はブレが目立つ。直径は横軸で

23cm、縦軸は図が欠落しているため不明である。

- ⑨貼り込み：図1は描いた紙から、鏡部分・注記・断面図部分を切り取って古鏡帳に貼られている。図2は描いた紙が長方形の状態で貼られている。

共通部分の①から⑥で示される特徴から、両図は三角縁神獣鏡を描いたものと判断できる。両図は同じ鏡を描いたものと考えられるが、獣文帯を例としてもう一步踏み込んで言及すると、図1では獣の形状・順番・頭部の向きが後述する同範の可能性のある銅鏡と合致するのに対し、図2は形状も順番も異なっていることから、図1は実資料を見て忠実に描き、図2は図1を模写したのではないかと考えられる。ただ、断面については図1に描かれていない鈕及び鈕孔が図2で描かれているなど、不可解な点は残る。

## 2. 三角縁神獣鏡図の詳細

### (1) 図に描かれた三角縁神獣鏡について

両図に書き写された三角縁神獣鏡は、既に述べた神獣像の描写や銘文などの特徴から、「三角縁獣帯三神三獣鏡」(樋口, 1992), 「三角縁天・王・日・月・獣文帯三神三獣鏡」(下垣, 2016) などと呼ばれる銅鏡と同範の可能性が高い。このタイプの三角縁神獣鏡は、これまでに6面の同範鏡が確認されている(表1)。ただし、高良大社所蔵の推定祇園山古墳出土鏡(図3)では、上方右神像付近では円座が省略されている(水野, 2019) ようだが、両図ではその表現がない、文様の位置が異なるなど、いくつかの相違点がある。

両図に描かれた鏡の直径は、図上でおよそ23～24cmで、上記同範鏡グループの直径は全て22cm前後であることから、本図は同範鏡グループの鏡より大きく描かれている。

### (2) 注記内容について

図1には次のような注記がある。

○図の右側

表1. 同範と推定される銅鏡の一覧

名称	発見地	発見年	直径	所蔵
原口古墳出土鏡	福岡県筑紫野市	1932年	21.9cm	東京国立博物館
祇園山古墳出土鏡(推定)	福岡県久留米市(推定)	江戸以前	22.1cm	高良神社
東求女塚出土1号鏡	兵庫県神戸市	1870年	22.2cm	東京国立博物館
茶白山古墳出土鏡片二一四	奈良県桜井市	1949年	内区破片	橿原考古学研究所
高塚山古墳出土鏡(推定)	三重県桑名?	不明	22.1cm	MOA美術館
椿井大塚山古墳出土鏡 M26	京都府木津川市	1953年	21.5cm	京都大学総合博物館・山城郷土資料館
三角縁神獣鏡図の鏡	徳島県鳴門市	1868年	22.7cm～ 23.5cm	不明

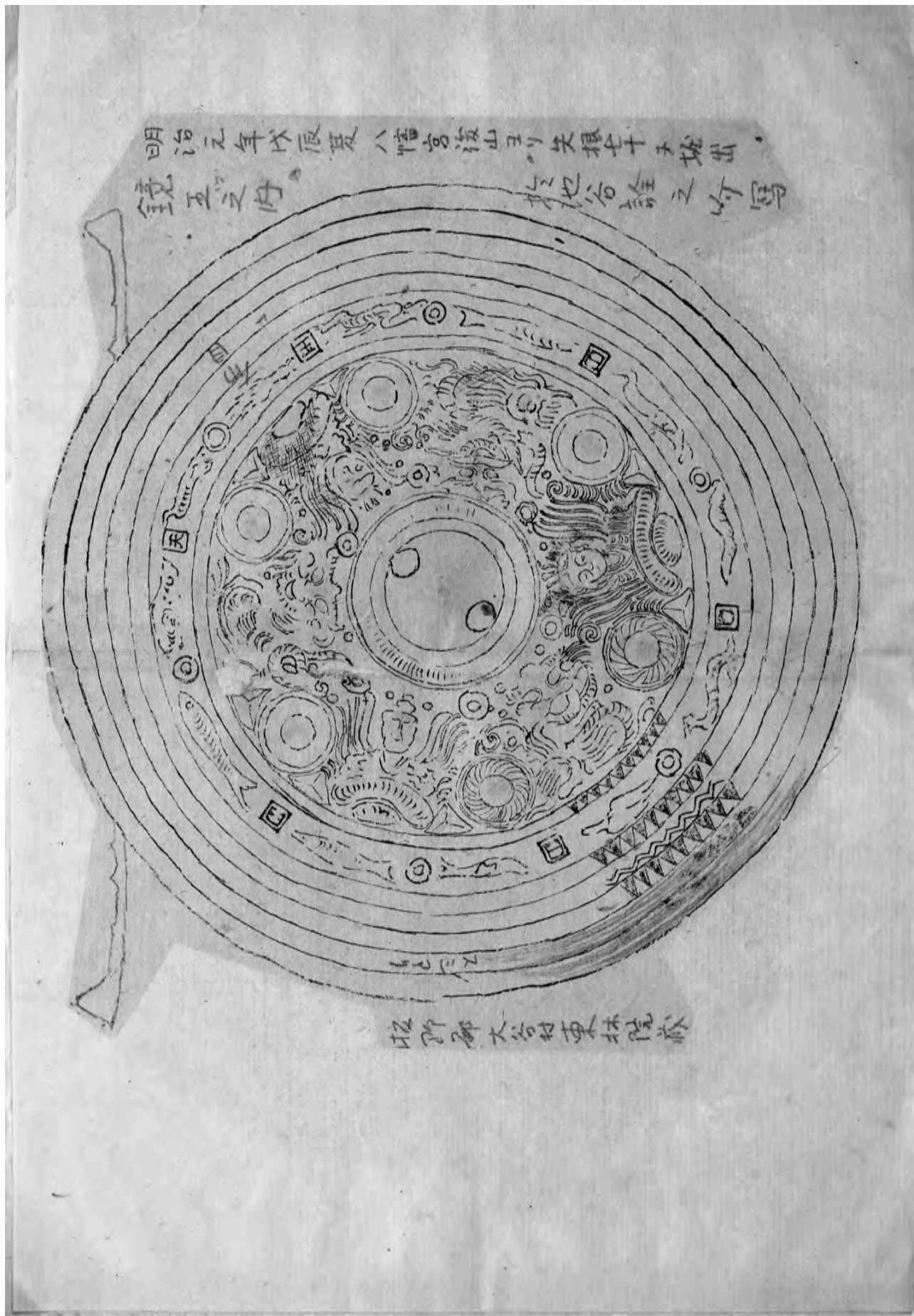


図1. 三角縁神獸鏡図その1

「明治元年戊辰夏 八幡宮後山ヨリ矢根七十ヲ掘出  
鏡五之内 於池谷詮之介写」

○図の左側

「板野郡大谷村東林院蔵」

注記には、1868年（明治元）の夏に、八幡宮（大谷八幡宮、現在は鳴門市大麻町大谷に所在する宇志比古神社のこと）の裏山から掘り出された5つの資料のうちの一つであること、池谷（現在の鳴門市大麻町池谷）で詮之介（守住勇魚の本名）が描き写したこと、当時は板野郡大谷村に所在するの東林院が鏡を所蔵していたことが記されている。

鏡を所蔵していたとされる東林院の現在の住職である近藤龍彦氏と副住職の加藤一真氏に話をうかがったところ、この鏡に心当たりはないとのことである。鏡が掘り出されたとされる1868年ごろは、明治の神仏分離令の影響で寺院や神社は大きく変わっていった時期で、東林院においても大谷八幡宮から八幡大菩薩や大般若経典六百巻が社殿から移されるなど<sup>(2)</sup>、混乱状態にあったようだ。また大谷八幡宮が宇志比古神社となったのが1870年（明治3）9月のことであり、「八幡宮」という表記から、本図は鏡が発見された1868年から1870年の間に描かれた可能性も示された。地元では宇志比古神社を「八幡さん」と呼ぶことがあるようで、本図作成年代を絞り込むには至らないとは言え、重要な証言である。

八幡宮「後山」は、阿讃山脈から南に延びる複数の尾根のうち、南端に宇志比古神社が所在する尾根と考えられる。三角縁神獣鏡は前期古墳の副葬品と考えられることから、東林院及び宇志比古神社の周辺に築造された古墳について確認する。まず大正期には、宇志比古神社境内にある古墳の様子を記した図に、「鏡ヲ出シ所」として宇志比古神社本殿北側が示されている（森，2003）。次に『鳴門市史』上巻では、詳細不明であるが「宇志比古神社境内古墳群」について本殿裏・拝殿東側に古墳が存在し、拝殿東側からは古鏡・玉類が出土したことが記載されている（秋山，1976）。また、宇志比古神社境内の更に北側、現在は高松自動車道が東西に通る位置には西山谷古墳群がある。西山谷2号墳は竪穴式石室をもつ古墳時代前期の円墳で、鳥居龍蔵が言及した「竪穴式石室を持つ西山谷の塚穴」（鳥居，1888）に該当するとみられる（菅原・原，2001）。更に『鳴門市史』上巻では「西山谷の塚穴（乙図）」とあるのは竪穴式石室のことで、昭和初期まで前方部を前に出した前方後円墳が残存した（秋山，1976）としている。文化庁による「全国遺跡地図 徳島県」では、西山谷古墳群に1号墳

と2号墳を記載しているが、1号墳は破損を受けているとされる（文化庁文化財保護部，1980）。このように宇志比古神社周辺には、多数の古墳が存在し、八幡宮後山に該当する場所の特定は現段階では難しい。

「矢根七十ヲ掘出」から、大量の鏡が出土したことを示すようだが、現時点で該当する資料は確認できない。

「鏡五之内」については、図2では「五面之内」となっており、鏡が5面あったことを示しているのだろうか。ただし、同じ古墳で出土したものか、由来が異なる東林院所蔵鏡なのかは不明である。

「詮之介」は守住貫魚の子である。1854年（嘉永7）に生まれ、1871年（明治4）に徳島洋学校に学び、1872年（明治5）には守住家の家名を相続、1875年（明治8）には上京して洋画を学び、我国の初期洋画界に貢献した洋画家として活躍、その後日本画家としても活動し（徳島県博物館，1984）、1927年（昭和2）に死去した。勇魚は、両図に描かれた鏡が発見された1868年は、まだ十代中頃であった。勇魚が図を描いたのは、上京した1875年以前と考えると自然であろうか。本名の「詮之介」を記していることも注目される。

図2の注記は次のとおりで、図1の内容をかなり省略したものである。

○図の左側

「五面之内 板野郡大谷村  
東林院蔵」

### (3) 描画材について

図1の注記、図2では図全体の描画に鉛筆が用いられている。我が国において、鉛筆が海外から本格的に輸入されるようになったのは明治に入ってからで、日本国内での生産が始まったのは1874年（明治7）である。図1には1868年（明治元）に鏡が出土したと記されており、鏡の発見時点では描画材である鉛筆は輸入品だったことになる。「守住家資料」には、守住貫魚が1868年（慶応4）から1870年（明治3）に書き記した「手帳」があり、文字や絵を鉛筆でも描いていることから、貫魚は1868年には鉛筆を使用していたことがわかる。当時十代中頃の勇魚が輸入品の鉛筆を使用したことに疑問があったが、貫魚が使用していたことによって解消される。

### (4) 同範の可能性ある銅鏡と本図の関係

本図は、表1の同範鏡グループの6面のうちの1面を

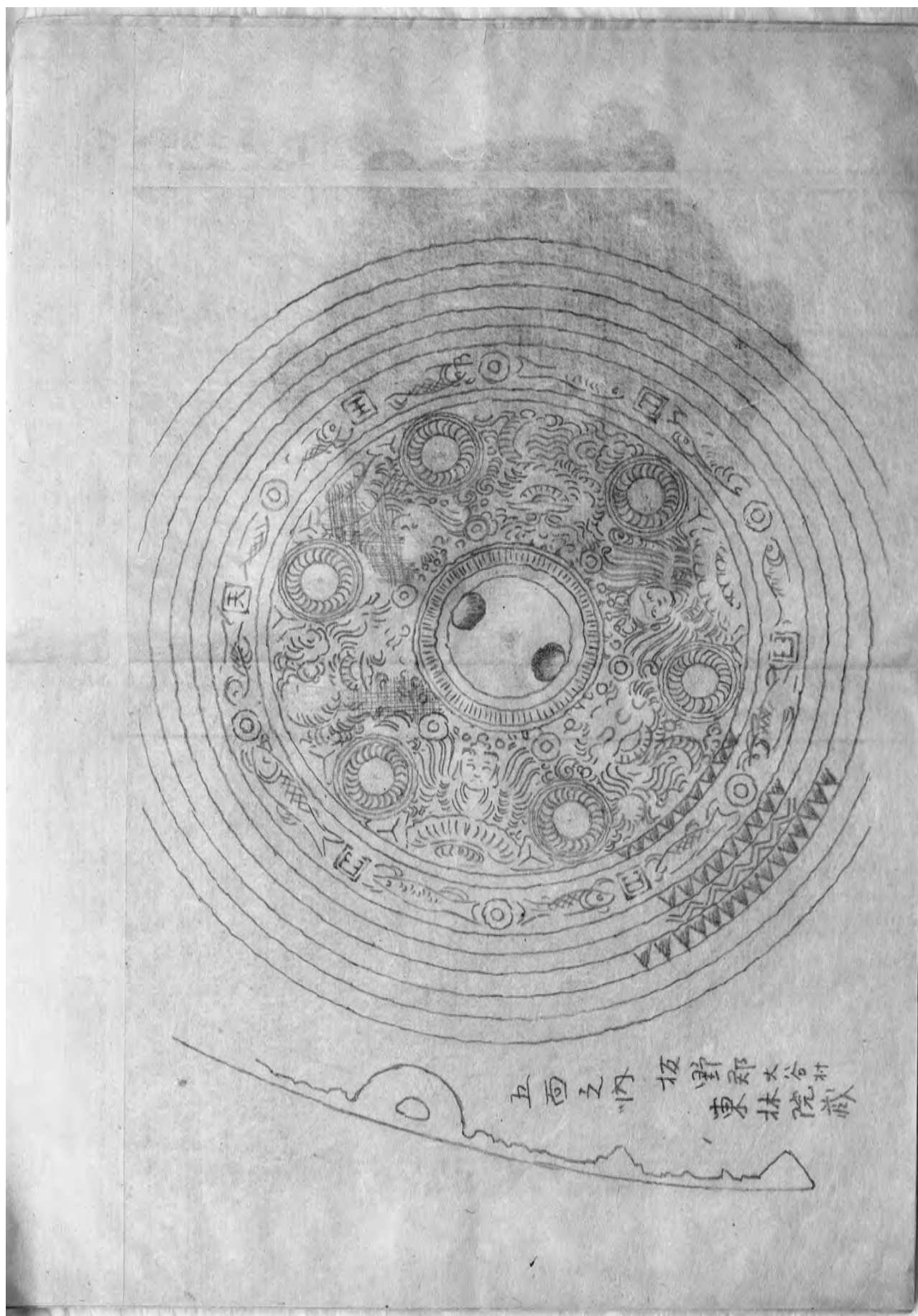


図 2. 三角縁神獸鏡図その 2



图3. 高良神社所藏 祇園山古墳出土鏡（推定）  
高良大社所藏 写真提供：久留米市教育委員会



图4. 兵庫県神戸市東灘区住吉町東求女塚古墳出土  
写真提供：東京国立博物館



图5. 福岡県筑紫野市原口古墳出土鏡  
写真提供：東京国立博物館

描き写した可能性もある。現在判明している情報により、該当の可能性のある資料を絞り込んでいく。高良大社（福岡県久留米市）所蔵の祇園山古墳出土鏡（推定）（図3）は1875年（明治8）の「古文書寶物目録」にこの鏡に関する記述があり、この時点で高良大社が所蔵していたことは確実にされる（廣木，2019）。現在もほぼ完全な形が残り、一部に異なる箇所があるが、本図は祇園山古墳出土鏡（推定）を描き写した可能性はある。東求女塚古墳出土鏡（図4）の発見は、両図を描き写した鏡が発見された1年後の1870年であり該当の可能性はある。ただ、現状写真を見る限りでは複数に割れたものを修復しているようなので別の鏡の可能性が高い。原口古墳出土鏡（図5）、椿井大塚古墳出土鏡、茶白山古墳出土鏡の発見年は勇魚の没後の1930年以降であり該当しない。伝桑名出土鏡は発見年代不明で、現在の施設に所蔵された経緯も不明であることから言及は難しい。

### 3. 徳島県内の三角縁神獸鏡について

徳島県内では、4面の三角縁神獸鏡が確認されている（表2）。そのうちの3面は宮谷古墳（徳島市）の発掘調査で出土した。鈕が欠損するがほぼ全面が残る1号鏡、内区の破片のみの2号鏡、外区の破片のみの3号鏡である（村田，2019）。残る1面は、板野郡板野町吹田で採集されたとされる内区の鏡片（橋本，2001）である。どれも両図とは文様などが異なるため別の鏡である。

宮谷古墳周辺と阿讃山脈南麓の鳴門市から板野町にかけては、古墳時代前期に、前方後円墳に代表される数多くの古墳が築造された。阿讃山脈南麓の古墳群は鳴門・板野古墳群として史跡にも指定されている。これらの古墳からは中国製の画文帯神獸鏡をはじめとする銅鏡が出土する例がある。しかし、三角縁神獸鏡については宮谷古墳の出土例のみで、鳴門・板野古墳群に至っては、出土状況不明の板野町吹田出土鏡のみという状況である。本図に描かれた鏡が、宇志比古神社北側にあった古墳の副葬品であれば、鳴門板野古墳群での三角縁神獸鏡出土例として注目される資料となるだろう。

表2. 徳島県内出土の三角縁神獸鏡一覧

名称	発見年	直径など	所蔵
宮谷古墳出土1号鏡（三角縁張作六神四獸鏡）	1989年	22.4cm	徳島市立考古資料館
宮谷古墳出土2号鏡（三角縁唐草文帯二神二獸鏡）		内区片	
宮谷古墳出土3号鏡（三角縁神獸鏡）		外区片	
伝板野町吹田出土鏡（三角縁新作徐州銘四神四獸鏡）	1920年頃	内区片	

### 4. 守住家資料と考古学について

「守住家資料」は、守住貫魚とその子（勇魚，周魚）に関する文章・作品・下絵・模型・収集品・遺品等で構成される資料群である。1971年（昭和46）に、当館の前身である徳島県博物館に寄贈された約800件の資料（徳島県博物館，1984）を母体とし、2004年（平成16）に約3100件の資料が追加された。古鏡帳は追加分に含まれている。守住貫魚は、おりにふれて古器物や同時代の道具、珍物、風俗を書き留めた。仲間から図や拓本などをもらい、刊本の挿図も敷き写した。それらの資料は、一枚もの、冊子、卷子などのかたちで今も残されている。また、いわれのある石や貝、植物の実や種などの自然物もあつめた好古家としても知られている（大橋，2009）。

この守住家資料は、現在の考古資料の研究にも活用されている。その一例として、守住貫魚が、1854年（嘉永7）2月に阿波国勝浦郡田之浦村で出土した古墳時代の短甲を描いた「古甲図」がよく知られる。そして、2014年に小松島市図書館郷土展示室で短甲片「田浦出土古墳時代甲冑」が確認され、古甲図と関連が注目された。両者が同一のものとする決め手には欠くが、両者が同じ古墳から出土したもの（栗林，2014）、現存する短甲片が「古甲図」の一部とするのが妥当（橋本，2015）と評価されるなど、守住家資料は徳島の考古学にも存在感を示している。

なお、徳島県博物館に寄贈された守住家資料のうち、勇魚の手による油彩画、水彩画、スケッチ等は1990年に徳島県立近代美術館へ保管転換となった（仲田，2011）。勇魚関連資料は、本図のような張り込み図などが博物館にも残っているようだ。

### 5. まとめ

以上を総合すると、不明な点も残るが、両図は現存する鏡との同范関係が推定できるほど詳細に描かれていると言える。描き写された鏡は、現存する高良大社所蔵鏡や東求女塚古墳出土鏡である可能性は残るが、発見の時期や場所が具体的に注記され、その内容は現在の考古学的な視点でも矛盾がないことから、徳島で出土した未知の三角縁神獸鏡である可能性が高い。

徳島では三角縁神獣鏡の出土数が少ない。本図に描かれた三角縁神獣鏡が、再発見されることを切に願う。

## 謝 辞

本稿を成すにあたって、東林院住職の近藤龍彦氏、同じく副住職の加藤一真氏には、格別のご理解を頂きました。また、以下の諸氏・機関より多くのご教示、資料提供、掲載許可を頂きました。ここに記して厚く御礼申し上げます。久留米市市民文化部文化財保護課、高良大社、東京国立博物館、東林院、穴井綾香、氏家敏之、大橋俊雄、大橋育順、栗林誠治、島田豊彰、田川憲、辻 貴子、原 芳伸、松永友和（敬称略）

## 参考文献・引用文献

- 秋山 泰. 1976. 古代. 鳴門市史編纂委員会, 鳴門市史上巻, p. 167-282. 鳴門市, 徳島.
- 文化庁. 1980. 全国遺跡地図 徳島県. 18 p. 文化庁文化財保護部. 東京.
- 橋本達也. 2001. 徳島における三角縁神獣鏡の新例と中国鏡. 徳島県立博物館研究報告, (11) : p. 133-167.
- 橋本達也. 2015. 小松島市田浦出土甲冑の再発見と子安観音古墳. 小松島市教育委員会, 新居見遺跡・田浦遺跡発掘調査報告書—市道田浦 29・41・42・43・号線工事関係埋蔵文化財調査報告書一, p. 137-142. 小松島市教育委員会, 徳島.
- 樋口隆康. 1992. 三角縁神獣鏡綜鑑. 254 p. 新潮社, 東京.
- 廣木 誠, 2019, 五 考古資料. 久留米市市民文化部文化財保護課, 久留米市文化財調査報告書第 423 集「高良大社所蔵歴史資料」, p. 39-43. 久留米市教育委員会, 福岡.
- 栗林誠治. 2014. 勝浦川流域における前・中期古墳の動態. 青藍, (10) : 77-91.
- 水野敏典. 2019. 高良大社所蔵青銅器の三次元形状計測. 久留米市市民文化部文化財保護課, 久留米市文化財調査報告書第 423 集「高良大社所蔵歴史資料」, p. 44-50. 久留米市教育委員会, 福岡.
- 森 清治. 2003. 鳴門市宇志比古神社の残る古墳資料について. 青藍, (1) : 55-59.
- 村田昌也. 2019. 令和元年度特別企画展 宮谷古墳の時代. 47 p. 徳島市立考古資料館, 徳島.
- 仲田耕三. 2011. 守住勇魚に関する守住家資料について.

徳島県立近代美術館研究紀要, (12) : 3-14.

- 大橋俊雄. 2009. 生誕二百年 守住貫魚—御用絵師・好古家・帝室技芸員—. 103 p. 徳島県立博物館, 徳島.
- 下垣仁志. 2010. 三角縁神獣鏡研究辞典. 554 p. 吉川弘文館. 東京.
- 下垣仁志. 2016. 日本列島出土鏡集成. 557 p. 同成社, 東京.
- 菅原康夫・原芳伸. 2001. 西山谷古墳群. (財) 徳島県埋蔵文化財センター, 阿讃山脈南麓の古墳群—四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査概報— p. 29-41. (財) 徳島県埋蔵文化財センター. 徳島.
- 徳島県博物館. 1984. 徳島県博物館所蔵資料目録第 13 号 守住家資料. 55 p. 徳島県博物館, 徳島.
- 鳥居龍蔵. 1888. 阿波國板野郡大谷村塚穴, 東京人類学会雑誌, 3 (24) : 114-117

## 注

- (1) 徳島県立博物館の常設展は、2021年8月9日にリニューアルオープンした。新しい常設展では、「歴史文化コレクション」を設置し、当館の人文分野（考古、歴史、民俗、美術工芸）各担当者が持ち回りで展示を行うこととなり、その第1回目として、美術工芸分野による「阿波のやまと絵師 守住貫魚」の展示を8月9日から11月14日の期間で行った。展示では、古い鏡の写生などを貼りこんだ貼り込み帳について「古鏡帳」と題して図1の頁を開いて展示し、読み解きラインでも両図の写真展示と解説を行った。
- (2) 東林院のホームページ (<https://torinin.jp/history/>)